



日本山岳会 通常総会

昭和五十九年度

新監事に竹田寛次氏



1984年(昭和59年)

6月号(No. 468)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

日本山岳会通常総会	(1)
カンチ登山成功し全員無事BCへ	
下山	(1)
ネパール・ヒマラヤの荒廃を	
どう防ぐか	(3)
海外の山	(4)
ブータン事情	
第21回『この一本展』より(2)	(5)
「名山図譜」「白鳳」	
図書紹介	(5)
「ベルナー・オーバーラント」	
「神室岳」「富士山はなぜフジサンか」	
東西南北	(6)
お願いとお知らせ	(4)(8)(15)
追悼 角田吉夫氏	(9)
ルーム日誌	(9)
昭和59年度除籍対象者	(9)
昭和58年度収支決算書	(10)
昭和59年度予算書(案)	(11)
昭和58年度事業報告	(12)
昭和59年度事業計画(案)	(13)
会員移動・図書受入報告	(14)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

「お知らせ電話 234六六五九」
「お知らせ」のため、当初、入会者を二〇〇名と見込んでいたものが一七三名と下回り、入会金の見込み額が減少したにもかかわらずこれを補うことができた。事業収入では山研の収入も広告料収入も当初予算を下回った。寄付金収入は折井健一氏の遺族からのもので、カンチエンジュンガ隊の預り金は支出の方でも出ているので備忘的に記

カンチ登山成功し全員無事BCへ下山

・カンチ通信 No. 6 (4月3日)

日本の春の便りとともにBC近くまで出かけて頂いた橋本総隊長、三辺隊長も本日カトマンズに戻りました。その後の隊の行動は順調に進んでいます。

隊の先頭は標高七二〇〇メートル、いわゆるグレート・シエルフ直下のABC地点まで進み、現在はABC建設のための荷上作業が着々と進んでいます。

隊のトップでルート開拓にあたってきた重広、賀集らは予定通りラムゼーでの休養に入りました。

また後発隊の平野以下もようやくBC入りし、一部はすでに

今年もまた上高地山研で逢いましょう!

第一キャンプ以上での高度順化に入りました。只野のラムゼーでのハンググライダーのトレーニングも順調に終了、今後一週間以内に六一五〇メートルのCI付近からのテストフライトが予定されています。
天候も今のところ安定していますが、気圧の谷と峰との定期的移り変わりがはつきりし始め、降雪量も多少増してきました。グレート・シエルフまでのルートはいかにも長大で、流石にカンチは大きな山だというのが実感ですが、四月後半からのABC以上での行動に備えていよいよ気を引きしめて計画を進め

昭和五十九年度の本会の通常総会は、五月十八日(金)午後六時より、東京都千代田区六番町十五番地の主婦会館において、委任状による会員一三八三名と、出席会員一三〇名の合計一五一三名により開催された(定款第三十三条により会員総数三九四名のうち三分の一以上が総会に加わったと認められる)。

議題に入る前に佐々会長から挨拶(次号掲載)があって、ひきつづき定款第二十九条により佐々会長が議長に指名され、司会の神崎忠男常務理事の案で、質疑応答の面を考え、これに田口、山田両副会長が加わって議長団をつくり議事に当たってもらうこととなった。

第一議案の事業報告(関係資料はこの会報の10ページ以降に掲載)は総務担当の大倉昌身常務理事が逐一読みあげていった。事業報告の質疑では岩登り講習会の行なわれた小川山について質問があり、近年、クライミングのグレンデとして注目されている奥秩父の小川山について大倉理事から説明があった。

収支決算および財産目録については財務担当の西村政見常務理事が説明に当たった。全般にいえるのは、収入が予算を上回り、支出が予算を下回ったため、当初、赤字予算を組んでいたものが、三六万円ほどの黒字となった。

載されてあるだけである。

支出の方では運営管理費が予算より若干下回っているが、給料・手当と会議費がそれぞれアルバイトや役員討論会のため予算を超過している。事業費の予算超過分の主なものはその他事業費で、内訳は、来日した中国登山協会の人々の接待費、マナスルの映画会、カンチの壮行会に要した費用である。

また財産目録の説明では図書の増加数が二二冊など、例年とくらべて大きな変化のないことと、借入金には四年後の一月には全額返済となる、といった説明があった。

以上の財務処理について、小倉茂暉監事からは、四月六日に松田雄一監事とともに監査したが、適切に処理されていることが認められたと、監査報告があった。

続いて五十九年度事業計画(案)と予算案について、それぞれの担当理事から説明があったが、特に財務担当の西村理事からは、新年度の予算も、収入は前年度並みと低くおさえ、収支は多少赤字となるような、前年度と同様の予算を組んだこと、したがって次年度の決算でも今回と同じに、いくらか赤字となるのではないかと話があった。

第三議案では今年度で任期満了となる小倉茂暉監事に代わって、竹田寛次(会員番号四五九六)が満場一致で新幹事に選出さ

れた。

第四議案の会費滞納による除籍対象者(9ページ参照)は全部で八六名であるが、向う一年のあいだに、お知り合いの会員はこれらに接し、除籍対象者からはずされるよう骨を折ってもらいたい旨、議長より申し出があった。

その他の議題については若年層の会員を増やす件につき東海支部の代表から質問があったが、議案としてとり上げられておらず、活発な意見の交換にとどまった。

こうしてすべての案件は処理され、最後に議事録の署名人として高橋聡、大峰芳枝の二会員を指名して総会を終えた。

なおこのあと、総会に出席した各支部の代表の紹介があったあと、八十周年行事について説明があった。

山田二郎副会長が八十周年行事にかかわる寄付金は、現在、四四七名、四、五四〇、〇〇〇円が集まったと報告し、協力された会員への礼状は即刻、発送するよう準備中である旨を述べ、引き続きほかの会員への協力も呼びかけた。

また関連行事のカンチ登山とボゴダ峰登山については宮下秀樹評議員より説明があり、最終年に当るボゴダ峰登山は広範囲の登山を計画しているの、会員の協力をお願いしたいとのことであった。

例年どうりの懇親会は、このあと同じ場所で開催、それぞれの

会員はグラスを傾けながら歓談した。

出席者・順不同 浜野正男、河野幾雄、井口正男、村木富士、河野之保、太田敬、片岡 博、今西寿雄、松田雄一、田口二郎、佐藤一栄、岡田光行、山田二郎、中村純二、西沢健一、小原晴子、中川 武、沢木由美子、勝田房治、鈴木邦之、細井澄子、石田要久、生田目彰久、生田目弥栄、川島新太郎、進藤波男、黒石 恒、小野利次、渡辺兵力、高橋 聡、絹川祥夫、望月達夫、田中茂夫、山本 元、武田満子、久保孝一郎、高本信子、小山睦子、小原勝郎、松丸秀夫、村上勝太郎、魚本定良、佐藤テル、榎本 進、橋本 清、高遠宏、山口道弘、福井正吉、小倉茂暉、水野 勉、吉沢一郎、岸田権二、細川沙多子、大倉昌身、五沢智也、大塚博美、織田政美、中村あや、大森薫雄、西村政晃、平井吉夫、小森正明、島田 興、藤井 明、堀田弥一、中島正夫、野口秋人、松井辰弥、鳴原啓佑、佐々保雄、山本朋三郎、宮下秀樹、中世古隆司、蒲生明登、板橋元一、羽田栄治、関口周也、吉武正子、小林太刀夫、川森左智子、木下是雄、谷口現吉、吉田 宏、鈴木敏雄、岩橋崇至、西丸震哉、入沢郁夫、広羽 清、田村俊介、岡沢祐吉、宇津力雄、菅原広男、大峰芳枝、神山良雄、神崎忠男、藤井正彦、名須川 浩、金山淳二、藤田礼子、千葉重美、織内信彦、大越堅助、高沢英雄、中屋健二、梅野淑子、北博正、金坂一郎、小倉重子、坂本正智、松家 晋、赤松功也、長嶋正浩、高橋 詢、古谷聖司、黒川 恵

(記事・岡沢祐吉／写真・松家 晋)

てゆきたいと思っています。

BCにて(鹿野勝彦)

・カンチ通信 No.7(4月19日)

カンチエンジュンガ登山もいよいよ後半に入り、天候も三月とは異って周期がはっきりし、悪天期間の降雪量は増えましたが気温も上がり、風も多少弱まってまいりました。

三月末に第三キャンプ(前進ベース)予定地七二〇メートルまでルートをとのぼしたあと、主力メンバーが休養に下ったこともあって計画の進行は一時停滞気味でしたが、四月十三日には第三キャンプを設営し、その後、南峰、中央峰各ルートへのルートワークを開始しました。

本日現在、南峰ルートは七七五〇メートル、中央峰ルートは七八〇〇メートルまでロープをのぼしてあり、それぞれの第四キャンプ予定地にほぼ到達した形です。

主峰ルートは七六〇メートル付近まで中央峰ルートと共通しており、今後予想される二十日からの悪天候があけたあと、独自のルートワークを開始する予定です。ファクシミリによって三・四日間の大体の天候が把握でき、かなり助かっています。

ハンググライダー計画については第一キャンプ(六一五〇メートル)から二回のフライトを終了しており、特に二回目は練

習用のグライダーにカメラ、スキー、パラシュート等、フル装備着装で充分の揚力を得た点が大きな成果でした。

残された日時はあと三週間から四週間ですが、全力を尽して頑張りたいと思います。

BCにて(鹿野勝彦)

・カンチ通信 No.8(4月29日)

早いものでカンチ登山もBCを設営して一ヶ月半、そろそろ最終段階に入って参りました。前進ベース、グレート・シエルフ上の七二〇メートルから四本のルートをとのぼすわけですが、そのうち西峰(ヤルンカン)を除く南峰、中央峰と主峰の三本のルートについては、すでにそれぞれの第四キャンプ地点七八〇〇メートル前後までのルートワークは完了し、若干の荷上げも行なわれています。

ただこの高度では酸素なしの行動だけにメンバー、シエルパの疲労ははなはだしく、仲々机上の計画通りにはすすまないことも多くあります。なんとか五月三日頃には各ルートの第四キャンプを建設し、十日前後までに最終アタック(縦走)の態勢に入ってゆきたいと考えております。

幸いに天候は相変わらず安定しており、特にこれまで風の強かった前進ベース以上でおだやかな日が多くなっているの

ハシンボジウムV

ネパール・ヒマラヤの

荒廃をどう防ぐか

去る二月四日午後、国際文化会館講堂において日本ネパール協会との共催により、表題のテーマで、シンボジウムが開催されたので、概要を報告します。本シンボジウムは昨年十二月上旬、カトマンズにおいて開催されたICIMOD(山岳総合開発国際センター)の開所式、ならびに第一回のシンボジウムに出席された、川喜田二郎、沼田真氏、帰朝報告を兼ねて、ネパール・ヒマラヤの自然環境の破壊が深刻な問題となりはじめたことをとりあげ、ネパール・ヒマラヤに關係ある人々がお互いに意見を交換し、より理解を深めたいとの趣旨のもと開かれたもので、約一二〇名が出席し、盛会であった。

会は開会の辞につづいて、FAO制作の16mm映画「The Fragile Mountain」(荒廃する山々)が上映された。この映画は一九七六年に制作されたもので、ネパールの森林の減少する模様、それによる洪水被害、これに対する対策がとりあげられているが、VIOGASであるとか、ソーラー・システムのようなアイデアが実際のではなく、やはり、住民協力による植林

の対策としては、環境教育の実施、自然および自然資源の保全、人口増加の抑制、自然植生・動植物相の保護、安定収量林業の必要性等がとりあげられた。

が最も大切であることを教えていた。それにしても、年間の森林減少率が四・三%と世界でもっともはげしく、年間、面積にして約八万四千ha(東京都の面積二一萬五千六百haの約四割に相当)の森林が消滅しているというネパールの森林破壊の実情を画面で眼のあたりにし、出席者一同、いままさらながら認識を新たにした次第である。この日のシンボジウムのテーマの説明として、これ以上のものはなかった。

ついで、パネル・メンバーの講師が席につき、沼田真氏(本会会員、千葉大学名誉教授)より基調講演が行われた。(当初の予定演者、安岐皎一氏が病欠欠席のため急遽変更された)

基調講演は、一九七五年のユネスコのRegional Meetingの勧告にもとづき、ユネスコ自身およびMAP計画国内委員会の努力によって、カトマンズに設立されたICIMOD発足の経緯にふれたあと、今回のICIMODの会合の中でとりあげた重要な問題について次のような説明があった。(1)ヒマラヤの森林破壊の原因は、人口の急増に起因しており、そ

(2) センターの役割としては、前記(1)の推進のほか生物圏保護地域の提唱や Sustained Yield Forestry(安定収量林業)にみられるような生態学上よい水準を維持しながら上手に森林や草地を管理していくことが必要。そのためには応用研究だけでなく基礎研究を行うことが必要である。

(3) Integrated Mountain Development の概念は、保全という考えを入れた上手な開発のことであり、これがICIMODの基本的考え方である。このようにICIMODの考え方は、本日のシンボジウムのテーマが目的とするところとも一致している。

ついで川喜田二郎氏の司会により討論の部にうつったが、それぞれのパネラーの意見を簡単に紹介してみたい。(発言順)
◎渡辺桂氏(国際協力事業団農林水産開発協力部長)
一九七七年より三年間、国連のUNDC、FAOのスタッフとして、ネパールで「住民林業振興プロジェクト」を指導された貴重な経験をのべられ、途上国の林業振

で、なんとかチャンスが把握できるものと期待しております。

ハンググライダー計画についてもテストフライトやフライヤ本人の順化など順調にスケジュールをこなしていますので縦走に先んじて最終フライトのチャンスを使いたいと考えております。CIにて(鹿野勝彦)

・カンチ通信 No.9 (5月22日)

御無沙汰しました。日本ではそろそろ入梅を迎える頃でしょうが、ヒマラヤでもモンスーンの兆しがしのびよっています。

長かった私達の登山もようやくBC以上の行動にピリオドを打つことになりました。

残念ながら百%目的を達することはできませんでしたが、不完全ながらカンチエンジュンガ

興には住民のニーズにあった住民参加の姿勢が必要であることを強調された。

◎D・B・ピスタ博士(トリブバン大学教授)
林業の実態調査などを行うにあたっては文化人類学的アプローチが必要である。なおこれからの文化人類学の仕事は、過去のことを研究するのではなく、毎日ぶつかっている問題をどう解決していく

必要。

南峰、中央峰、主峰(即ち西峰を除く三つのピーク)の縦走、登頂をなしとげ、標高七八〇〇メートル地点からのハンググライダー飛行をも成功させ、本日全員無事BCへ下山しました。行動経過の詳細は追って別の形でお届けしますが、取り敢えずこの計画をご支援いただいた皆様に、心から御礼致します、このことを御報告申し上げます。

今後5月25日頃までにBCを撤収し、二、三班に分かれてキヤラパンを開始、イラム、ピラトナガル經由6月5日頃までにカトマンズに帰着の予定です。最後まで気をひきしめて行動いたす所存です。時節がらどうか皆様方にもご自愛下さいませ。(鹿野勝彦)

かということの研究し教育することが必要であると強調された。

◎佐々保雄氏(本会会長)
ヒマラヤ登山隊自身が使用するマキの量はたいしたことではないが、ポーターの消費するマキが問題。

日本のヒマラヤ登山隊もこれからはただ登るだけでなく、地元住民に何かおかしをする必要。

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

ランドサット衛星の写真で森林破壊の現状把握ができるので、この利用を提唱したい。

◎三島昭男氏(朝日新聞社環境担当編集委員)

森林浴のできる日本は楽園である。しかし私たち日本の森林は、日本が途上国からバルブや木材を持ってくることで緑を保っている。途上国の資源の犠牲の上になっ

◎中根一郎氏(緑の地球防衛基金事務局長)

緑の地球防衛基金としては、①林業の現状把握：登山隊やトレッカーからの情報を期待 ②調査・研究、調査・開発に助成 ③行動実施：ネパールの学校林用苗畑造成のためボランティアを派遣することを考えており、ネパールの林業振興プロジェクトによるパンチャット保護林のうち、優秀なものを表彰することも考えている。

◎沼田 真氏

ネパールでも、ICIMODのトレーニングをかねて「草地診断法」を開発して、状態を診断し、放牧頭数や期間についてアドバイスしたい。

◎川喜田二郎氏

このような会合は集るだけでも

意義がある。林業開発などの場合にはまず実体がどうなっているかを総合的に把握することが必要である。住民、これにかかわる役人、林業の専門家、とそれぞれの立場で実態調査を行い、共通認識に立つ必要がある、その上でそれに最も適した技術、いわゆる、Appropriate Technology(適正技術)で解決していく必要があると強調したい。充分に時間がなくて意をつくせなかったかも知れないが、今日、出席の皆様が共通の問題意識をもっただけでも意義があったと思うと結ばれた。

最後に本会前会長の西堀栄三郎氏が閉会の挨拶を述べられたが、その中に、途上国の国々に対する援助にあたっては、その国の人々には、それぞれの考え方があ

話の例にあげ、今後のネパールに

海外の山

ブータン事情

秘境とされていたブータン山城での登山活動が黎明期を迎えようとしている。同国の登山規則が発表された昨年は、田部井淳子さんの女性隊が同国西部の五千メートル峰に初登頂しているが、これはジチュ・ダゲ(Jichu Dage)七二〇メートル(からの転進であった。ジチュ・ダゲ峰には、その後、オーストリア隊が登頂したというニュースが流れたが、義務付けられている同国政府提出の報告書はなく、今春、日本ヒマラヤ協会隊(八木原園明隊長)が登頂を果たし、七月には東京都北部勤労者山岳連盟隊(小宮昌平隊長)の、ナムシ

・ラ(Namshi La 六六〇〇メートル)の登山があり、また日本からのカン・ブの計画もあるなど、少なくともネパール登山とは逆に、同国へのラッシュが実現する気配だ。

東西三三〇〇、南北一四〇〇と、九州よりや大きく、人口百二十万人のブータン。チベット(中国)、インド(昔はイギリス)の大国のはさまにあつて、かつてはさまざまな紛争の火種をかもししたが、中国がチベットを支配した一九五〇年から、国境周辺を固める中国側に対して、同国はインドとの関係を深めている。インド自体、さしずめ電力用水源をネパールに求めるのと同様、ブータンからの水源を利用した発電機能をここに求めている。これにともない、王制時代ながら近代化の足音は徐々にではあるが高まっているという。

登山の取り扱いも、最近、通信観光省から「ブータン観光公社」に移って、半官半民の組織体と

したところは、政府の登山観光事業への取り組みの姿勢の一端をうかがわせる。

登山規約によると、まず六一〇〇メートル未満の山はトレッキング・ピークとして入山料は取らない。六一〇〇～六五〇〇の未踏峰が千五百ドル(既登のピークは千ドル)、六五〇一～七三〇〇は三千ドル(二千ドル)、七三〇一以上は五千ドル(三千ドル)となっている。

登山シーズンは三月から六月と、八月から十二月の二期に分かれるが、モンスーンの影響の少ない同国山城では、登山活動は年中無休。またトレッキングでは、一人、一日八十五ドルから百ドル(滞在日数による)の入国料金が徴集されるが、これはホテル代、食料(米が主体)、ポーター代まで含まれている。登山の場合はアプローチの間、これに準ずる代金が必要である。

このほか、遭難救助に備えて、ヘリコプター救助施設に三千ドルの保証金を納入することがうたわれている。ただし、ヘリコプター要請のない場合は、その予納金は返済されるなど、インド側のテコ入れでぬかりない登山規約が作られている。高所ポーター、ガイドは皆無。したがって入山各隊によって順次養成されるのが望まれ、都労山の場合は、六月の偵察行で五人の現地人の訓練を適時行ない、七月の本隊では、そのなかから二人の有能なポーターを隊に組み入れ、日本、ブータン合同の形式を取るといふ。このなかには、来日経験のあるもの、また田部井隊に同行して、五千メートルの登頂を果たしたのもいる。

(片山全平)

お知らせ

カンチ登山隊報告会は7月30日(月)、市ヶ谷の自治労会館で、18時30分より開催。

対する援助の姿勢は「求めよさらば与えられん」という気持でやっ
ていく必要があるとお話があ
り、多くの参会者の共感を得て、
会は盛会裡に終了した。

【出席者】 合計一二一名。本会
会員の出席者次の通り。

遠藤光男、岡沢修一、大森弘一
郎、川喜田二郎、神原 達、片岡
博、黒石 恒、向後元彦、齊藤か

つら、齊藤健治、佐々保雄、三枝
礼子、沢井政伸、高橋定昌、田口
二郎、高遠 宏、武田満子、千葉
重美、鳥海昭二郎、中村純二・あ
や、西村政晃、西堀栄三郎、沼田
真、沼倉寛二郎、堀川 清、松沢
憲夫、松田雄一、宮原 颯、山本
良三、渡辺正臣 以上三十一名
(松田雄一)

第二十一回

『山の一本展』より(2)

八、名山図譜

全三巻

谷 文晁

前回(一九八二年)には「日本
名山図会」の初刷本を展覧したの
で、今回は同時代に流布したと思
われる「名山図譜」の後刷本を展
示する。

この二種の本は全く同じ内容の
もので山岳図が九十図(八十九
座)、柴邦彦等三人の序文と著者
の自序、そして巻末には増訂二図
に関する覚書と川村元善の跋文と
からなる三冊本である。ただ「名
山図譜」の場合表紙題箋には標題
のみを記載し、天・地・人の区別
は印刷されていない。

この本は、前記覚書の期日が文

化四年となつているところから、
今日まで伝わる「日本名山図会」
のタイプの元本とされているが、
奥付を付して市販したというもの
ではないから確定的なことはいえ
ない。ただ、文化四年を境として
八十八図構成のものと、九十図構
成のものがあることだけは認め
てもよいのである。それにしても
何故、岩手山だけを訂正し玉東
山一座を追加したのか、この覚書
だけでは納得できないものがある。

加うるに元の図をそのまま残
し訂正図を無難作に後にくっつけ
たという、荒っぽい編集ぶりには
全くおどろかされてしまう。にも
かかわらずこの本がヒットして版
を重ね、著者の周辺で急速に普及
したというのは、山岳画集という
特種な性格にもあるだろうし、当
時、流行の名所図会的なパターン

新刊 山の 本 紹介

ベルナー・
オーバーラント

―特選二〇〇コース―

H・グロツセン 著
近 藤 等 訳

この本はガストン・レビュファ
が監修している、ヨーロッパ・ア
ルプス特選一〇〇コースシリーズ
の一冊である。このシリーズで出
版されているものに共通するの
は、写真集としても通用するカラ
ー写真が各所に挿入されているこ
とであり、それにふさわしい上質
紙が使用されていることである。

またそのどれもが各山城ごとの
ヴェテランによりコースが選択さ
れていることもあって、外部の者
にはなかなかみつけられない楽し
いコースが入っていることだ。

この本もその例外ではなく、例
えば前山のひとつといえるロープ
ルナーがそれで、地元の方はこの
岩場で練習してからホッハ・アル

ペンの岩場へとでかけるそうだ。
それにこの外部の者の目にふれに
くい地域にあるスルス湖や、その
そばにあり出発点にもなっている
ロープホルンヒュッテは、都会の
雑踏から離れた安息の場所でもあ
る。

同じように、ズインメンタール
にあるヘミフルーもホッハ・アル
ペンにはない岩登り用の山で、こ
の十月、SAC支部の月例山行目
的地となったヘミフルーへは、著
者のグロツセンがリーダーとして
参加するそうである。

一九八三年七月一日 山と溪谷
社発行 二五六ページ 定価六
五〇〇円 (岡沢祐吉)

神室 岳

―その山名と―

登山史覚え書―

深野稔生 著

まず神室岳という至って地味
な、知名度の低い山城を克明に研
究された労に對し敬意を表した
い。丹念な文献渉獵と、それらを
駆使しての考証は、登る以上に労
多かつたものと思われる。

副題から得る印象は少々堅い
が、読み始めてみるとすらすらと
読み進んだ。その理由は明
快な文章と同時に本文と関連す
る写真、図、註を同一ページの
下に巧みに配置して、文章の内容
を理解し易くしているからであ
る。

本書は、全体を山名考、ルート
概要、登山小史の三部に分けてい
る。

Iの山名考では、神室岳の語源
探索にはじまり、ついで奥羽観蹟
聞老志(おおうかんせきもんろう
し)ほか七編の古文書により山名
変遷の跡を追っている。これらは
前述のように、一つの古文書ごと
に山名を記した概念図が添えられ
ており、一目瞭然である。

IIのルート概要は、一般尾根コ
ースとバリエーションルートを、
これも概念図と写真を添えて紹介
し、さらに積雪期についても論及
した立派なガイドになっている。
IIIの登山小史には全ページの六
割が当てられ、本書の中心をなし
ている。

著者は、木暮理太郎が第二高等
学校(明治二十九年入学)在学中
におこった山岳旅行をもつて、
「東北における近代登山の嚆矢」
と位置づけ、まず蔵王山城への沼
井鉄太郎と山形高校山岳部の足跡
を紹介してから主題の神室岳に入
り、大正十五年二月の山形高校の
厳冬期初登頂にはじまる戦前の学
校山岳部(山高、二高、東北帝大)

の足跡を紹介している。
ついで、戦後の仙台山岳会の誕
生。昭和二十年代の大橋克己、桜
井保男らの残雪期南沢からの登
頂。昭和三十年代に入つては柴崎
徹ら仙台山一高の傾倒振り。四十
年代以降の東北大学氏家治らによる

にもよるものと思われる。

この本が「日本名山図会」と改名されて文化九年(一八二二)、先づ江戸の須原屋から市販されるやたちまちベストセラーとなり、京都や大阪でも売られるようになり、本のサイズも名所図会などに似せてやや小形とした。

ここに展示の「名山図譜」もその小形本に似たサイズであり、紙質の低下等から判断して松柏堂版「名山図譜」と千鐘房版「日本名山図会」は、暫く平行して流布していたものと思われる。

神原 忠夫

九、白鳳

創刊号

白鳳会編

『小島鳥水全集』(全十四巻・別巻二)の編集に従事して、初出文の割出しと校訂作業、単行書未収録文の発掘にかなりの時間をとられている。最近では「横浜貿易新報」に「日本アルプス」や

『浮世絵と風景画』の初出文が多々あるのを確認しておどろいたが、『白鳳』創刊号(昭和八年十二月)の巻頭に、鳥水の「山岳会の仕事は創作に在る」のあることを、山村正光氏を経由して山寺仁太郎氏から教えられた。それは第十一巻の校了寸前にまにあつて、

組入れることができた。目次の題名表記に「創作にあり」とあるのだが、本文表記の「在る」を採ったのは、目次を誤植と判断したためである。

そのほか小島集太郎氏からは、『娑婆』第一巻第五号(昭和四年十月)に「扇頭小景」と題する重要なエッセイのあることを教えられた。該当巻にまにあわなかったで、おそらくのちに補遺として採録することになるだろう。『鳥水全集』は二度、三度と出せるものではないとおもうので、この時期にたとえ断簡零墨なりとも蒐めておきたい。日本山岳会諸賢の御協力をお願いする次第である。

近藤 信行
(以下次号)



東・西
南・北

箱根の自然と

鎌倉古道を歩く

― 四月の会員懇談会より ―

毎月十五日にルームで開かれて
いる会員懇談会は、四月がたまた

東稜の積雪期一番乗りを述べ、さらに著者らによる東南壁初登攀をもって締め括っている。

その記述は明快かつ臨場感に溢れている。著者は「おわりに」の中で、「ひとつひとつの山行をドラマ仕立てにしなかつたかの危惧」「私見というレトリックの落とし穴」と述べているが、これは歴史を記述する上で避け切れない要素であり、むしろ読ませる要素ともなるのではないだろうか。私は著者の神室岳に対する傾倒の現れと解したい。

本書は神室岳の研究書であると同時に、私の読後感からすると神室岳に関する啓発書でもある。早速関係地図(二万五千作並、山寺、笹谷峠、今宿)を求めて山名、沢名を記入し、いつでも行ける準備をした。因に同地図上に当該山城で山名が記されているのは神室岳と三方倉山、沢は仙人沢のみである。

近年、新聞の読書欄に、注目される地方出版物の紹介がされているが、本書も充分それに値するものと思われる。

B5判 一一一ページ 昭和五十八年九月 仙台市日伸書房刊
二〇〇〇円 (山田哲郎)

富士山はなぜ

フジサンか

谷 有 二 著

著者の山名考の基盤は「私たちの祖先のほとんどは、始めから日本列島とおぼしきあたりに住んでいたはずである。そこへ、ヤマとかアサマ系の言葉を持ち込んだ南方系の人々が、海伝いに、あるいは、照葉樹林帯を通じてやってきた(P288)。「普通、私たち日本人は、単一民族国家と思い込んでいたけれど、アイヌ・日本・琉球の三民族国家であり、歴史を遡れば遡るほど、アジア全体の血が流れ込んでいく」。「山岳名称といえども東アジア的な立場に立たなければ、結論はともかくとして、客観的な意見が述べられない(P272)」と言う。『三民族国家』という概念は論外であるとしても「アジアの人種のるつぽ」として日本民族をとらえるのは常識である。

山名考の方法論として著者は、「地形用語・伝説・アイヌ語・マレー語・朝鮮語・宗教・歴史・文化など、さまざまなパターンを注ぎ込んで、山岳名称の意味を探ろう」としてきた(P292)と言う。

今までの多くの山名考に比べると広い目で文献を検討している努力は大きい。全般を読みおわり、日本の山々の名称のいわれをバツサ、バツサと解きあかす手法は見事である。著者の手法にかかれれば日本全国の山名のいわれ、成り立ちは立ち所に説明が可能であると思わざるを得ない。

ただ気にかかることは、例えば、朝鮮語・マレー語で解釈すると、漢字のイメージとは全然別な山名となり、またこれは山名を解く一つの方法である、という方法論はわかるが、この方法を日本全国におしひろげてする山名考は、日本全国の山名を普遍化してしまうのではない。著者の山名解説を読むと、著者の言う限りにおいては正しい。

地方での山名を考える時、著者の原語解釈、比較言語学的方法では説明不足のこともある。また、『地形用語』からの山容の説明も、一般的には著者の言うことは理解できるが、もう一步ふみ込んで、その山容の見える方向、地域を基盤として、その上で、歴史観、民俗学、人類学、言語学及び医学的見解等を合わせて方法論を組立ててゆかないと、その山容からの山名発生もボヤケてしまい、山名のみが独り歩きしはしないか。読む者をして文字遊びにおち入らせるおそれがあるのではないか。

山名に興味を呼ぶには良い本であるが、一度文字になると地名は独り歩きを始めるから、この点に心配である。山男が静かに自分の登った山を想う夜半の一般書としてすすめる。

一九八三年九月一日発行 山と溪谷社刊 三〇二ページ 定価 一一〇〇円 (山本明三郎)



ま日曜日だったので、郊外の山を歩く計画となり、自然保護委員会、総務委員会の共催で、箱根古道の一つである湯坂道での花見をかねた山行となりました。

当日はおだやかな天候にめぐまれて、絶好の花見日和と思われましたが、今年の桜の開花は遅く、湯本で三分から五分咲きぐらい、それでも小涌谷駅までの登山電車窓から一時に咲ききそう梅、桃、れんぎょうを充分に楽しませてもらいました。

千条の滝で自然保護委員会の渡辺正臣会員から「箱根の自然と文化、歴史」などのレクチュアをうけ、静かな杉木立の道を浅間山にむかいました。山道は今年の異常気象の影響か、雪で苔が枯れており、また枝が折れたり、幹が曲がったりしている木もみられ、のどかな箱根でも、想像以上に厳しかった今冬の自然を知ることができました。

浅間山の頂上では、先発して、みそ汁、コーヒ、紅茶などの用意をしてくださった、総務委員会の人達により、熱いもてなしをうけ、ゆっくり昼食をとりながら、明るさのたまたま箱根の春を味わうことができました。この湯茶の用意のため、重い荷を担ぎ上げて

くだった総務担当の人たちに心から感謝いたします。人数がつかめず準備するのが大変だったとか伺いました。

二十八名のにぎやかな昼食がすみ、記念撮影の後、ゆるやかな道を湯坂山へと向いましたが、両側の桜と楓は、まだまだ芽も蕾も固く、日陰にはまだ残雪さえありました。この道は、ここが箱根かと思うほど静かな歩き良いコースであり、石畳の山路にかかることは、阿仏尼の書いた十六夜日記の一節「いと

さかしき山をくだる。人の足とどまりがたし」の通り、一気に下り切ってしまう。くだりきった湯本旭橋で一応解散となり、ここで帰る人、ひと風呂浴びてゆく組とに別れ、旧箱根街道沿いの天山野天風呂へと足をのびました。名泉の一つとかで古い湯元のようにでした。飲めるといふ地元の人に教わり飲んでみると、深い味わいのある御湯です。この野天風呂の利用については、箱根町役場のお世話になりました。

参加者(順不同) 入澤郁夫、関塚貞亨、松丸秀夫、小倉厚、高遠宏、神崎忠男、渡辺正臣、遠田栄、山口暁、重村清、宮入保徳、金澤喜八、田中茂夫、遠藤光男、澤井政信、石橋正美、中保、梨羽時春、木名瀬亘、藤井正彦、遠田篤子、小山睦子、渡部温子、大峰芳枝、神崎めぐみ、奥徳子、山崎健、中山孝司(渡部温子)

会員通信

奥秩父の瑞穂山の管理人による婦女暴行殺人事件は、悲しい衝撃的ニュースでした。私たちに憩いと、やすらぎを与え、また羅針盤の役目もする信頼する山小屋の主が、魔がさしたとは言え、単独ハイキングの女性を襲い殺害するのは、低山でも中級山岳でも、高山岳でも、山小屋の経営者、管理人

は素朴で清廉潔白で、黄金の御殿を守り、登山者を温く迎える、豊かな人間性を持った人々がほとんどです。私たちの期待を裏切らない

会員懇談会

スキー映画の夕べ

二月十五日(水) ルームにて

総務委員会・フィルム委員会

映画

「銀界の弥次喜多」

「スキーと海」

「スキーへの招待」

「白魔は招く」

三水会主催の西丸震哉会員の講演の後、引き続き総務・フィルム委員会主催のスキー映画の夕べが開かれた。上映されたフィルムは、フィルム委員会が保存、管理している数多くの十六ミリフィルムより、スキーに関係したものを選んだの四本。いずれも昨年、会員の風見武秀氏より寄贈を受けたものである。

最後の「白魔は招く」は、蔵王の樹氷林の滑降をテーマにした楽しく美しいフィルムである。作成は今泉プロダクション。山麓の温泉までのアプローチは馬車という、年輩の方にとっては昔懐かしいシーンから始まる。白魔とはモニスターの意と思われ、大きく育った樹木の造形美と、スキーヤーの軽やかな身のこなしを、時にコミカルに、そして幻想的にとらえている。

「銀界の弥次喜多」は、ドイツのスキー映画。美しい山々を舞台に、いたずら好きの二人組と警官がスキーをはいって追いかけてくるというコミックもの。白黒の無声映画で、字幕が右からの綴りなのが印象的であった。

次の「スキーと海」はイタリ映画で、撮影者はフォスコ・マラーイーニ氏。雪の山頂より海に向かって滑降し、海辺でスキーを取って水着となり潜水を楽しむという趣向。水中撮影にも念が入っている。

映像に見る往年のスキーは、近

いで欲しいと念願して小論を投稿しました。

(松岡 繁)

年のフアッシュショナルなスキーヤーや、喧騒なスキー場とは無縁であり、また最新装備の山スキーとも別の世界のものである。しかしその技術は現在のもに引けをとるものでなく、まさに「板」につ

東北ブロック

'84 集会 報告

福島支部

四月二十一日、第三回を迎えたブロック集会は残雪の穏やかな安達太良の峰を堪能してもらおうと計画しました。しかし自然とは全く皮肉なものでこの冬には異常豪雪と低温続きに悩まされ、その上、開催前日にも雪が降り、新野地温泉への国道も閉鎖状態でありました。

東北各支部、遠くは北海道支部の会員の皆さんと、本部からは佐々会長ほか多数参加いただき、地元会員を合わせると総勢九十三名の大会合となりました。

折り悪しく、ガスと小雨で翌日の安達太良から岳温泉への山行は断念を余儀なくされました。そのうさ晴らしというか、懇親会は盛り上がり、夜半まで山の話が続き酒を酌み交し、朝を迎えた連中もあつたようでした。

懇親会では地元支部長の歓迎のことばに始まり、ブロック代表の宮城の伊達支部長よりの挨拶、佐々会長よりはブロックのまとめりをお褒めいただくとともに今後、

いたものと思われた。昔のフィルムの回転数が、最新式の映写機では再現できず、一部に少し速い動きもあつたようだが、無事に終了、九時に散会となった。(神谷光昭)

益々の結束を期待するとのお言葉を、また山田副会長からは八十周年の記念事業の概要と成功を期することが話された。続いていよいよ酒宴に入り、会員の相模屋旅館より寄贈された銘酒「稲川」の鏡割りを佐々会長、宮城の蓬田夫人のもつピッケルで行ない、後藤名誉会員の乾杯の音頭で幕が開かれました。

翌二十二日は期待していた天気も回復せず、朝食後、雑談的に、山田副会長、神崎理事から八十周年記念事業の内容、JACの実体が話され、会員からは本部に対する忌憚のない質問、要望があり、短い時間ではあつたが、実のある話合いがもたれました。

三十名近い会員から鬼面山(一四八一・五米)までの山行希望が出たので、旅館前にて全員記念撮影後、山行組を送り出し、残留組は露天風呂に、また付近の散歩に時を過ごしました。

別室にては八十周年記念ブロック行事について、本部担当者として

北各支部の支部長及び関係者により話し合いがもたれ、今後の対策、スケジュール等を検討しました。結果的には夫々の立場から大変有意義な会合に終始しました。山行組の全員帰宿を待ち、昼食後、明年の山形での再会を約束して散会となりました。

参加者(秋田)岡田光行、佐藤昭義、佐藤兼治、佐々木安、北林嘉鶴子(岩手)佐藤敏彦、阿部国雄、田鎖寿、鹿野松男、関口 宏、立花幹雄、松田和弘、佐藤紀子

(宮城)伊達篤郎、熊谷正志、熊谷藤子、千田早苗、蓮田時男、蓬田三枝子、佐々木郁夫、佐々木豊喜、遠藤昭治、飯野信、高橋 功、庄司駒男、相沢基平、樋渡順一、吉中登、平沢亀一郎(山形)後藤幹次、村上勝太郎、加藤達男、水沢富一郎、梅津博、田宮良一、大橋克也、真田匡三、三浦繁司、会田茂雄、斉藤清吉(北海道)平野 明、柳田凉子、亀井秀子(東京)佐々保雄、山田二郎、神崎忠男、石橋正

美、坂本正智、大峰芳枝、板倉健二、大谷幸子、荒野康子、内山脩一、高橋詢、小林 碧、沢田周平(福島)中島正夫、渡辺千代蔵、古市義孝、後藤泰治、赤沼 節、佐々間高男、白石田春治、相模八郎、清野義美、西関良光、安藤 治、寺島昭一、八巻和男、清和良晴、加藤博一、山倉洋一、野地克也、鈴木 嘉、遠藤日出夫、大森常三郎、広瀬由昌、手島精一、笹川慶子、河上安藤、伊藤義男、鈴木千定、鈴木琢美、佐藤英一郎、大谷 司、阿部明義、鈴木松三、松井忠治、大友 繁、江花俊和、笠間嘉孝、石井貞次(中島正夫)



海外登山計画書 ご送付のお願い

「山」(465・一九八四・三)誌上で、年報「山岳」の「遠征・登山ノート」へ寄稿のお願いをいたしました。これは結果です。この元になる登山計画書を掌握していなければ、連絡などのフォローが不可能です。

つきましては、海外登山を計画されている方は、ネパール、パキスタンはいまでもなく、特に動静の掌握に困難なインド、中国、ソ連、南北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニアの各地域およびトレッキング許可のネパールの山々の登山計画書を当委員会宛にご送付下さるようお願いいたします。

「遠征・登山ノート」については、フォームが用意されておりまして、先の登山計画書に基づき当方よりお送りいたします。もし漏れておりました際はご請求下さい。

—お知らせ—

日本山岳画協会

大町 特別展

◎七月二十二日(日)

◎八月十九日(日)

◎大町山岳博物館にて

◎入場料 全館共通で三〇〇円

追悼

名誉会員

角田 吉夫氏

一九八四年一月三十一日逝去。享年七六歳。一九〇七年生。大正年代から登山を始め法政大学山岳部創立期のメンバーとして田中菅雄(本会員)氏らと活躍。南北アルプス、上信越、北海道、秩父等に足跡が多い。主な記録として一九二八年三月穴毛谷から笠ヶ岳、四月野反池から白砂山、八月石狩岳から石狩川下降、一九二九年一月仙ノ倉山、三月仙ノ倉山ノ三国峠等があり、特に上越国境積雪期登山のパイオニアとして知られた。著書『上越国境』(一九三二年刊)は上越の山の最初のすぐれた案内書として広く活用された。

一九二七年本会入会、会員番号一〇四六、一九三〇年七月幹事、後理事或いは評議員として前後十数年在任し『山日記』と会報の編集に尽力し功績があった。『山岳』及び会報への寄稿も少なくない。一九七七年永年会員。一九七八年十一月名誉会員に推挙された。

告別式は二月二日成城の自宅で行なわれたが、本会を代表して田口副会長が参列し、法政大学山岳部関係者のほかに吉沢一郎、川崎精雄、織内信彦、私らが参じて故人の冥福を祈った。

(望月達夫)

・ルーム日誌

四月

2日(月) 総務委
3日(火) 会報編集委
6日(金) 常務理事会、会計監査
9日(月) 理事会
12日(木) 評議員会
13日(金) 青年懇談会
16日(月) 総務委、図書委
17日(火) 婦人懇談会
18日(水) 三水会
20日(金) 科学委講演会
23日(月) 総務委
24日(火) 自然保護委

昭和五十九年度除籍対象者

一六二〇 今井田研二郎
二二七一 加藤 喜一郎
三七九六 東京理科大学山岳部
四八〇八 瀬戸 正昭
五〇一二 浜中 康栄
五二八〇 小林 庸晃
五五七三 村田 光昭
五八一三 千島 兼一
六〇二九 武田 宗之
六二八六 上条 清明
六四二五 小栗 孝康
六四三七 森田 洋史
六四八〇 徳田 憲正
六六六〇 溝口 重正
六八六一 石塚 誠之輔
六八七二 坂本 観晃

26日(木)

フィルム委

今月の来室者37名

会員移動(四月)

物故
9439 矢田 秀孝(4・10)
支部変更
6545 河西 俊郎(信濃へ)
物故
948 渡辺 漸(4・2)
退会
3996 村山 金吾
6433 小野 芳橋
7590 神奈川 甚吉
8326 竹森 謙一
9028 大村 誠
9180 石黒 和子

七三七一 宮寺 忠夫
七三七七 齊藤 純一
七三九五 市川 恵子
七四二三 マチュ・D・フォレス
七五四七 黒川 恵
七六七二 長沼 雅子
七七一三 原 滝夫
七七九〇 河野 照行
八二五五 入沢 勝
八三〇三 立原 弘
八四一四 前神 直樹
八四五三 手塚 正
八四九〇 大阪外国語大学山岳会
八五六八 柴宮 一男
八六三六 北川 敏孝

八六八八 齊藤 修二	五七九〇 伊藤 信隆
八七三九 智片 健二	(関西)
八八九一 マックス・ベルナルド	四四一四 神戸大学山岳部
八八八五 入月 繁	四六九一 野村 哲也
八八八六 上栗 優一	六三八四 井原 蓉子
九〇一八 小椋 成人	六八五九 西嶋 恵
九〇三四 遠矢 孝行	七〇〇三 松本 憲庚
(北海道)	七四二一 鍋島 義雄
六八〇二 青山 義信	七六一三 松木 直子
(岩手)	八一七九 二見 隆久
八四二五 八重樫 芳令	(山陰)
八九九九 藤原 喜代美	五二六六 船木 匡
(秋田)	(東九州)
七〇三七 田村 禎助	八七〇四 中西 文雄
八一七八 今野 昭	(熊本)
(宮城)	四四七七 首藤 宗利
七五四五 菊地 薫	(その他)
(越後)	四一三五 内山 健次
八二八五 高波 隆男	四二九八 永石 良元
(信濃)	五四九八 田辺 幸雄
八六〇六 菅野 政夫	五九五五 石原 謙
(山梨)	六二五三 青木 先
四五四三 丸山 正博	六四三一 堀江 礼二
六一四一 田中 義元	六五五一 広瀬 正美
(静岡)	七二一七 大日 常男
四五四四 江越 千代子	七三三九 坂東 美智夫
六五八六 山口 博	七四六七 山口大学体育会山岳部
(東海)	八〇四二 原 雅彦
六九一五 本田 昌司	八一二四 信友 浩一
七二七〇 国島 陽三	八二八四 間島 保
八五九〇 加藤 雅代	八五九三 駒宮 博男
八七八三 荒木 弓	八六六一 宮崎 勉
(岐阜)	八九五三 若林 善弘
七八四六 今井 純男	(海外)
八五三一 藤田 良樹	五五七〇 中島 寛
(富山)	(以上八十六名)

その他管理費	350,000	336,000	△ 14,000
雑費	250,000	203,983	△ 46,017
事業費	21,160,000	20,997,231	△ 162,769
出版費	9,020,000	8,796,004	△ 223,996
図書費	650,000	661,996	11,996
調査研究費	650,000	608,440	△ 41,560
指導費	1,270,000	1,289,002	19,002
支部関係費	1,000,000	1,028,410	28,410
海外諸関係費	170,000	113,150	△ 56,850
山研運営費	1,600,000	1,666,084	66,084
その他事業費	1,550,000	2,347,075	797,075
印刷費	980,000	925,500	△ 54,500
通信運搬費	3,920,000	3,180,280	△ 739,720
光熱水料費	350,000	381,290	31,290
借入金返済支出	3,312,000	3,311,904	△ 96
借入金返済支出	3,312,000	3,311,904	△ 96
別途会計繰入支出		1,407,793	1,407,793
別途会計繰入支出		1,407,793	1,407,793
予備費	1,500,000	0	△ 1,500,000
予備費	1,500,000	0	△ 1,500,000
小計	37,032,000	36,482,932	△ 549,068
カンチェンジュンガ隊 預り金		72,070,000	72,070,000
カンチェンジュンガ隊 預り金		72,070,000	72,070,000
計	37,032,000	108,552,932	71,520,932
次期繰越収支差額	8,305,778	11,633,412	3,327,634
次期繰越収支差額	8,305,778	11,633,412	3,327,634
合計	45,337,778	120,186,344	74,848,566

別途積立金

昭和 59 年 3 月 31 日現在

(単位: 円)

内 訳	前期繰越	繰入収入	取崩支出	次期繰越
終身会費積立金	500,000	300,000	0	800,000
図書出版研究基金	6,917,973	412,293	0	7,330,266
長期計画準備積立金	3,500,000	695,500	0	4,195,500
退職給与積立金	2,000,000	0	0	2,000,000
合計	12,917,973	1,407,793	0	14,325,766

財 産 目 録

昭和 59 年 3 月 31 日現在

(資産の部)

1. 基本財産

(単位: 円)

種 類	預 入 先	金 額
貸付信託	三井信託銀行 本店	2,380,000
"	日本信託銀行 本店	420,000
"	中央信託銀行 本店	5,200,000
合 計		8,000,000

2. 現金および預貯金

(単位: 円)

種 類	預 入 先	金 額
現 金		60,703
振替貯金	東京地方貯金局	359,807
普通預金	協和銀行 市ヶ谷支店	1,210,969
"	三菱銀行 市ヶ谷支店	1,831,159
"	三和銀行 本郷支店	38,746
"	東京銀行 本 店	1,698

昭和 58 年度収支決算書

自 昭和 58 年 4 月 1 日

至 昭和 59 年 3 月 31 日

一般会計 収入の部

(単位: 円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増減(△)
基本財産運用収入	560,000	614,580	54,580
基本財産利息収入	560,000	614,580	54,580
入 会 金 収 入	3,000,000	2,685,000	△ 315,000
入 会 金 収 入	3,000,000	2,685,000	△ 315,000
会 費 収 入	23,500,000	25,136,526	1,636,526
会 費 収 入	23,500,000	24,836,526	1,336,526
終身会費収入		300,000	300,000
事 業 収 入	5,760,000	5,373,184	△ 386,816
広 告 料 収 入	1,350,000	1,022,400	△ 327,600
山日記印税収入	560,000	560,000	0
その他印税収入	0	56,946	56,946
刊行物売上収入	450,000	540,490	90,490
その他事業収入	2,000,000	2,163,590	163,590
山研使用料収入	1,400,000	1,029,758	△ 370,242
寄 付 金 収 入		500,000	500,000
寄 付 金 収 入		500,000	500,000
雑 収 入	1,250,000	1,931,483	681,483
受 取 利 息	800,000	928,684	128,684
雑 収 入	450,000	1,002,799	552,799
別途会計運用収入		607,793	607,793
図書出版研究基金運用 収入		412,293	412,293
長期計画準備積立金運 用収入		195,500	195,500
小 計	34,070,000	36,848,566	2,778,566
カンチェンジュンガ隊 預り金		72,070,000	72,070,000
カンチェンジュンガ隊 預り金		72,070,000	72,070,000
計	34,070,000	108,918,566	74,848,566
前期繰越収支差額	11,267,778	11,267,778	0
前期繰越収支差額	11,267,778	11,267,778	0
合計	45,337,778	120,186,344	74,848,566

一般会計 支出の部

(単位: 円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増減(△)
運 営 管 理 費	11,060,000	10,766,004	△ 293,996
給 料・手 当	5,000,000	5,150,400	150,400
文 具 費	100,000	87,410	△ 12,590
印 刷 費	600,000	544,790	△ 55,210
旅 費 交 通 費	500,000	451,000	△ 49,000
通 信 運 搬 費	1,000,000	885,025	△ 114,975
火 災 保 険 料	70,000	60,350	△ 9,650
営 繕 費	200,000	154,400	△ 45,600
諸 税 会 費	550,000	516,732	△ 33,268
光 熱 水 料 費	220,000	233,567	13,567
電 話 料	320,000	347,120	27,120
会 議 費	150,000	216,989	66,989
交 際 費	150,000	131,360	△ 18,640
什 器 備 品 費	50,000	22,000	△ 28,000
振 替 手 数 料	200,000	189,990	△ 10,010
支 部 運 営 費	650,000	602,100	△ 47,900
福 利 厚 生 費	100,000	88,188	△ 11,812
事 務 所 管 理 費	600,000	544,600	△ 55,400

鳥(カット原画)	墨 絵	石井 鶴三	図 書 室
メールドグラス	エッチング	"	"
モンブラン	"	"	"
後立山連峰	水彩	中村清太郎	"
カンチェンジュンガ	エッチング	ジュラギント ワイト	"
ユングフラウ (1966年作)	油	山里 寿男	事務所(集会所)
濁沢より北穂高	水彩—6	山里 寿男	図 書 室
槍ヶ岳初夏	油—10	中村清太郎	事務所(集会所)
カンチェンジュンガ	パステル	矢崎千代二	事務所(談話室)
北穂高滝谷	油—25	足立源一郎	"
或朝の槍ヶ岳	油—25	足立源一郎	図 書 室
北穂高岳主峰	油—25	足立源一郎	事務所(談話室)
槍ヶ岳	油—P8	足立源一郎	上高地山岳研究所
タンボチェの僧院	水彩—4	清野 恒	事務所(集会所)
シエルパニの親子	水彩—4	清野 恒	"

※ 他の絵画, 写真 省略

7. フィルム

「マナスルに立つ」他 62 点

8. 刊行物・服飾品棚卸現在高

(単位: 円)

摘 要	金 額
刊行物(山岳, 山岳複製版等)	1,220,760
服飾品・その他(ネクタイ・ペンダント・ト レーナー等)	1,395,220
合 計	2,615,980

(負債の部)

1. 長期借入金 未済残高 ￥10,870,338

ア 借入金 中央信託銀行株式会社本店

イ 利 率 年利 8.16%

ウ 担 保 事務所および図書室の建物と土地を担保として
差し入れる。

エ 返済年月 昭和 63 年 1 月まで

2. 退職給与引当金 ￥2,000,000

社団法人 日本山岳会 昭和 58 年度収決算額および財産目録を
監査し, 正確妥当なことを認めます。

昭和 59 年 4 月 6 日

社団法人 日本山岳会

監事 小 倉 茂 暉

監事 松 田 雄 一

昭和 59 年度 予算書(案)

自 昭和 59 年 4 月 1 日

至 昭和 60 年 3 月 31 日

一般会計 収入の部

(単位: 円)

勘 定 科 目		予 算 額	前 年 度 予 算 額	増 減 (△)
大 科 目	中 科 目			
基本財産 運用収入		600,000	560,000	40,000
	基本財産利息収入	600,000	560,000	40,000
入金会収入		3,000,000	3,000,000	0
	入 会 金 収 入	3,000,000	3,000,000	0
会費収入		23,500,000	23,500,000	0
	会 費 収 入	23,500,000	23,500,000	0
	終身会費収入			
事業収入		5,440,000	5,760,000	△ 320,000

普通預金	中央信託銀行 本 店	102,029
"	三井信託銀行 新宿西口支店	27,868
"	日本信託銀行 本 店	433
定期預金	協 和 銀 行 市ヶ谷支店	8,000,000
普通預金	協和銀行市ヶ谷支店(図書出版研究基金)	330,266
定期預金	" " (" ")	7,000,000
"	" " (長期計画準備積立金)	4,195,500
"	" " (終身会費積立金)	800,000
"	" " (退職給与積立金)	2,000,000
合 計		25,959,178

3. 建物および土地

(単位: 円)

A 事務所および図書室	金 額
場所 東京都千代田区四番町 5 番 4	
構造 鉄筋コンクリート造, 陸屋根, 地下 1 階付 5 階建	
(事務所) 区分所有建物 1 階部分 103.32 m ²	72,720,170
宅地持分 1,124.56 m ² ×339/10,000	
(図書室) 区分所有建物 1 階部分 55.22 m ²	
宅地持分 1,124.56 m ² ×339/10,000	
B 上高地山岳研究所	
場所 長野県南安曇郡安曇村上高地国有林 114 い林小班	
構造 鉄筋コンクリート造(一部木造) 1 棟 100.69 m ²	9,583,808
合 計	82,303,978

4. 図 書

種 類	摘 要	冊 数
和 書	58 年度 受入冊数 182 冊	4,940 冊
洋 書	" " 40 冊	1,930 冊

5. 什 器 備 品

品 名	取 得 月 日	取得価格 (円)	所 在
大テーブル(2台セット), チーク材 750 ×1200×720	48. 7. 31	164,200	上 高 地 山岳研究所
ソファセット, チーク材レザー張	48. 7. 31	178,000	"
冷蔵庫, 日立 R 303 T	48. 7. 30	148,500	"
テレビ, サンヨー 20-C 501	48. 7. 30	108,000	"
スク립トマティック宛名印刷機 M 36	53. 2. 10	265,500	事 務 所
リコピースーパードライ SD-105	53. 2. 27	158,000	"
書庫内移動書架一式, コンパックル	53. 2. 10	1,500,000	図 書 室
広接セット一式, 布張イス, テーブル XLE-30	53. 8. 2	218,000	事 務 所
閲覧用テーブル(2台), 木製	53. 9. 28	250,000	図 書 室
ライティングビューロー, 木製	54. 6. 23	280,300	"
テレビ, シャープ CT-2601 (寄贈品)	55. 6. 4	80,000	談 話 室
ビデオカセットレコーダー, シャープ VC 7000 (寄贈品)	55.12.27	116,000	"
フィルム収納キャビネット(スチール製)	56. 8. 8	254,000	図 書 室
図書カード容器 木製 3 段	56. 9. 12	200,000	"
書 棚 木製 2 段	56.12.22	500,000	談 話 室
合 計		4,420,500	

6. 絵 画

題 名	種類・号数	作 者 名	掲載, 保管場所
白 馬 岳	油 A-50	中村清太郎	日本民族資料館
富 士 山 麓	油 A-25	茨木猪之吉	"
田代池の白樺	油 変形 6	中村清太郎	事務所(談話室)
群 狼	墨 絵	石井 鶴三	図 書 室
伊豆半島	油 — 10	茨木猪之吉	"
針の木峠	油 — 10	茨木猪之吉	"
徳本峠から穂高連峰	墨 絵	石田 吟松	"
初冬の両神山	油 — 10	茨木猪之吉	"

次期繰越収支差額		7,960,412	8,305,778	△ 345,366
次期繰越収支差額		7,960,412	8,305,778	△ 345,366
合 計		45,473,412	45,337,778	135,634

昭和 58 年度事業報告

(58. 4. 1~59. 3. 31)

1. 登山の指導と奨励に必要な集会、講習会及び展覧会の開催

(1) 集 会

- 4 月 7 日 「カナダ山岳情報」 黒川 恵 (本 会)
- 4 月 14 日 日本山岳会学生部総会 (〃)
- 5 月 12 日 「ドイツ山岳情報」 岡沢祐吉 (〃)
- 5 月 21 日 「昭和 58 年度総会」支部長会議
(私学会館) (本 会)
- 5 月 21, 22 日 支部懇談会 (静岡鉄舟禅寺)
- 5 月 30 日 Dr. ウィルソンを囲んで (本 会)
- 5 月 31 日 山菜勉強会 (〃)
- 6 月 4, 5 日 ウェストン祭 (上高地)
- 6 月 11, 12 日 山菜山行 (守門岳)
- 6 月 15 日 会員懇談会「フィールドマナーノート
について」 中村純二 (本 会)
- 6 月 18, 19 日 新旧役員懇談会 (静岡富士ハイツ)
- 6 月 25 日 フィルム映写会「冬のロータン峠」
三田幸夫 (本 会)
- 6 月 28 日 プータントレッキング報告会
黒石 恒 (〃)
- 7 月 15 日 「今日のヒマラヤ」 池田常道 (〃)
- 7 月 23 日 委員会会議 (神田YMCA)
- 10 月 1, 2 日 懇親山行 (会 津)
- 10 月 8~10 日 スケッチ山行 (穂 高)
- 10 月 13 日 第 1 回山岳会秘蔵フィルム公開の夕
日下田実 (自治労会館)
- 10 月 20 日 学生部後期総会 (本 会)
- 10 月 28~30 日 学生部現地集会 (小川山)
- 10 月 21 日 ラムジー氏歓迎会 (本 会)
- 10 月 22 日 図書交換会 (〃)
- 10 月 27 日 サトパント登山報告会 高本信子 (本 会)
- 11 月 2 日 元カナダ山岳会副会長ハイン氏歓迎会
(〃)
- 11 月 6 日 第 20 回マラソン大会 (皇居周辺)
- 11 月 11, 12 日 秋山山行 (那 須)
- 11 月 15 日 会員懇談会「スキースの映画と昔のスキー
四方山話」 各務良幸 (本 会)
- 11 月 15, 16 日 青年懇談会丹沢研究会 (寄小屋)
- 12 月 3 日 昭和 58 年度年次晩餐会
(ホテルニューオータニ)
- 12 月 3 日 支部長会議 (本 会)
- 12 月 4 日 支部懇談会 (本 会)
- 12 月 4 日 懇親山行 (高尾山)
- 1 月 14~16 日 スキー山行 (柵 池)
- 2 月 15 日 フィルム映写会 スキー映画特集
(本 会)
- 2 月 16 日 学生部活動会計報告及び納会 (〃)
- 2 月 25 日 山岳図書を語る夕 (〃)
- 3 月 10 日 山岳史懇談会
今西錦司・西堀栄三郎 (〃)
- 3 月 15 日 講演会「南極裏ばなし」
村山雅美 (〃)

広告料収入	1,200,000	1,350,000	△ 150,000
山日記印税収入	560,000	560,000	0
その他印税収入	0	0	0
刊行物売上収入	450,000	450,000	0
その他事業収入	2,000,000	2,000,000	0
山研使用料収入	1,230,000	1,400,000	△ 170,000
寄付金収入	0	0	0
寄 付 金 収 入	0	0	0
雑 収 入	1,300,000	1,250,000	50,000
受 取 利 息	800,000	800,000	0
雑 収 入	500,000	450,000	50,000
小 計	33,840,000	34,070,000	△ 230,000
前期繰越収支差額	11,633,412	11,267,778	365,634
前期繰越収支差額	11,633,412	11,267,778	365,634
合 計	45,473,412	45,337,778	135,634

一般会計 支出の部

(単位: 円)

勘 定 科 目		予 算 額	前 年 度 予 算 額	増 減 (△)
大 科 目	中 科 目			
運営管理費		11,470,000	11,060,000	410,000
	給 料 ・ 手 当	5,250,000	5,000,000	250,000
	文 具 費	100,000	100,000	0
	印 刷 費	600,000	600,000	0
	旅 費 交 通 費	500,000	500,000	0
	通 信 運 搬 費	1,000,000	1,000,000	0
	火 災 保 険 料	70,000	70,000	0
	営 繕 費	200,000	200,000	0
	諸 税 会 費	550,000	550,000	0
	光 熱 水 料 費	230,000	220,000	10,000
	電 話 料 費	320,000	320,000	0
	会 議 費	150,000	150,000	0
	交 際 費	150,000	150,000	0
	什 器 備 品 費	300,000	50,000	250,000
	振 替 手 数 料	200,000	200,000	0
	支 部 運 営 費	650,000	650,000	0
	福 利 厚 生 費	100,000	100,000	0
	事 務 所 管 理 費	600,000	600,000	0
	そ の 他 管 理 費	350,000	350,000	0
	雑 費	150,000	250,000	△ 100,000
事 業 費		21,731,000	21,160,000	571,000
	出 版 費	9,233,000	9,020,000	△ 213,000
	図 書 費	650,000	650,000	0
	調 査 研 究 費	910,000	650,000	260,000
	指 導 費	1,240,000	1,270,000	△ 30,000
	支 部 関 係 費	1,000,000	1,000,000	0
	海 外 諸 関 係 費	170,000	170,000	0
	山 研 運 営 費	1,678,000	1,600,000	78,000
	そ の 他 事 業 費	1,600,000	1,550,000	50,000
	印 刷 費	980,000	980,000	0
	通 信 運 搬 費	3,900,000	3,920,000	△ 20,000
	光 熱 水 料 費	370,000	350,000	20,000
借入金返済支出		3,312,000	3,312,000	0
	借入金返済支出	3,312,000	3,312,000	0
予 備 費		1,000,000	1,500,000	△ 500,000
	予 備 費	1,000,000	1,500,000	△ 500,000
小 計		37,513,000	37,032,000	481,000

- スライドと討論 (本 会)
- 5 月 16 日 南ア・スーパー林道視察 (南ア・スーパー林道)
- 5 月 29 日 富士山大沢崩れ視察 (富士山)
- 8 月 25~27 日 白神山地ブナ原生林 「青秋林道」予定地視察 (青森・秋田県)
- 8 月 27, 28 日 立山自然保護全国集会
- 10 月 2~6 日 屋久島視察山行 (屋久島)
- 10 月 22, 23 日 奥鬼怒視察山行
- 11 月 19 日 自然保護のための学習会 「森林生態と土壌について」 (本 会)
- 12 月 20 日 講演会「山の樹木について」 中田銀佐久 (#)
- 2 月 28 日 講演会「野鳥の話」 中坪礼治 (#)
- 3 月 27 日 自然保護のための学習会 「エントロピーと自然保護」 (#)
5. 海外登山の企画および海外との交流
日本山岳会ボゴダ峰登山隊による中国ボゴダ峰登頂 (7月~9月)
日本山岳会カンチェンジュンガ峰登山隊によるインド・カン
チェンジュンガ峰登山計画
青年懇談会による韓国 ORM 山岳会との交流登山 (9月)
6. 機関誌などの刊行
「山岳」第 78 号発行
会報「山」第 453~464 号発行
「山日記」昭和 59 年版編集
7. 目的を同じくする外国山岳会等との情報交換
30 カ国 60 の団体と情報交換
日中合同登山推進のための中国団体関係者と情報交換

昭和 59 年度 事業計画 (案)

1. 登山の指導奨励に必要な集会, 研究会, 講習会, 展覧会等の開催
- (イ) 集 会
・小集会 (報告会, 講習会, シンポジウム)
本会, その他 20 回
・ウェストン祭 上高地 6 月 2 日~3 日
・山岳図書交換会 本会 10 月
・年次晩餐会 ホテルニューオータニ 12 月 1 日
・山岳図書を語る夕べ 本会 2 月
・山岳史懇談会 # 3 月
・来日外国登山家との交歓 本会, その他
・フィルム映写会 本会 6 月, 7 月, 11 月
・新入会員オリエンテーション # 3 月
- (ロ) 研 究 会
・登山医学研究会 駿河台日大病院 6 月
・高所登山研究会 本会, その他
・シンポジウム「ヒマラヤの自然と住民, 登山者」 11 月
・山の科学に関する研究会 本会
- (ハ) 展 覧 会
・この一本展 (山岳稀観本) 本会 2 月
- (ニ) 講 演 会
・登山, 山岳の科学研究に関する講演会 本会 4 月, 6 月, 1 月
・「中国登山医学の研究と歴史」講演会 6 月
・内外登山家による講演会, 映画会 本会, その他
2. 登山施設の改善, その他登山のための適切な事業
・上高地山岳研究所開所 4 月~10 月
・山に関する貴重なフィルム, スライド, テープ等の複製, 収集を行う。

- 3 月 14 日 第 10 回新入会員のためのオリエン
テーション (本 会)
- (2) 研 究 会
4 月 8 日 講演会「山岳気象について」
Dr. Barry 吉野正俊 (本 会)
- 5 月 28, 29 日 第 3 回登山医学研究会 (松 本)
- 6 月 24 日 講演会「人への落雷と安全対策」 北川信一郎 (本 会)
- 6 月 30 日 遭難救助研究会 松永敏郎 (#)
- 7 月 3 日 遭難救助研究会実技 (奥多摩)
- 7 月 16~18 日 八幡平高山植物探索山行 (八幡平)
- 10 月 15 日 山と登山の科学文献検討会 (青山学院大学)
- 10 月 24 日 ヒマラヤの気象予報 宮内俊一 (本 会)
- 10 月 29 日 雪と氷のシンポジウム「寒冷地の雪と
暖候地の雪」 井上治郎 他 7 名 (渋谷勤労福祉会館)
- 10 月~2 月 婦人懇談会高所登山セミナー 黒石 恒 堀井昌子 他 (本 会)
- 11 月 25 日 講演会「接峰面の研究と登山の想い出」 岡山俊雄 (本 会)
- 12 月 22 日 高所遭難対策委員会 (#)
- 1 月 23 日 最近の高所登山について (#)
- 2 月 4 日 シンポジウム「ネパールヒマラヤ地域の
荒廃をどう防ぐか」 日本ネパール協会・
日本山岳会共催 (国際文化会館)
- 2 月 17 日 講演会「山スキーの科学」 青柳裕樹 他 4 名 (本 会)
- (3) 講 習 会
10 月 1, 2 日 岩登技術講習会 (小川山)
- 12 月 10, 11 日 山岳写真技術講習会 白旗史朗 (精進湖)
- (4) 展 覧 会
2 月 25 日 この一本展 (本 会)
- (5) 全国にある 19 支部ではそれぞれ集会, 研究会, 講演会,
山行 (海外登山も含む) 等が活発に行われた。
7 月 2~4 日 北海道支部 15 周年記念山行 (羅臼岳) (北海道支部)
- 5 月 28, 29 日 日本山岳会東北地区親睦山行 (金華山) (宮城支部)
- 11 月 12, 13 日 第 26 回紅葉会 (富士御庭下り) (静岡支部)
2. 登山施設の改善その他登山のための適切な事業
上高地山岳研究所を 5 月~11 月まで開所
山と登山の科学文献目録の作成
登山に関するフィルム, スライド類の充実と目録作成
集会, 青年懇談会, 婦人懇談会, 高所登山, 図書, 自然保
護, 海外, 科学研究の各委員会による研究会開催
会員を対象とした登山に対する意識調査
3. 山岳遭難の予防とその対策に関する企画及び指導
各大学山岳部による夏山診療所開設 (7 月~8 月)
(槍ヶ岳, 五色沼, 唐松, 三俣山荘, 白馬岳, 合戦小屋,
立山, 尾瀬)
大学山岳部アンケート調査
学生指導者会議開催 11 月 27 日 (番町共済会館)
4. 自然保護活動の推進
環境庁との連携を密にし国立公園における山岳地の自然保護
地への協力
日高縦貫道路の反対活動
青秋林道建設計画中止の要望書提出
フィールドマナーノートの作成配布
4 月 15 日 「白神山地と屋久島の自然保護」

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・「日本・ネパールカンチェンジュンガ縦走登山」実施
4月～6月 ・ソ連「パミール国際キャンプ」参加 ・その他交流登山 <p>6. 機関誌などの刊行</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「山岳」第79年発行 ・会報「山」第466号～第477号発行 ・「山日記」昭和60年版編集 <p>7. 国内および国外山岳団体との連絡、情報交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内関係団体（日山協、都岳連、その他）との密接な連絡 ・日本ネパール協会の事業に対する協力（登山） ・海外登山団体との機関誌および情報の交換 <p>8. その他、目的を達成するために必要な事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山岳図書室の拡充を図る ・創立80周年記念事業の企画および実施 ・その他、目的を達成するために必要な事業を行う。 | <p>3. 山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏山診療所開設 ・遭難対策全国会議の開催
本会 4月 ・高所登山における遭難対策シンポジウム開催
本会 8月、10月 ・技術講習会の開催（岩登り、スキー等）
現地 5回 ・大学山岳部指導者会議の開催
11月 <p>4. 自然保護活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然保護全国集会開催
東京 10月 ・日米環境会議 ・自然保護に関する講演会
本会 2月 ・自然観察山行の実施
奥秩父、尾瀬 5月、10月 ・現地視察（5カ所） ・一般及び団体向けフィールドマナーノートの作成 <p>5. 海外登山の企画および実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国天山々脈（ボゴダ山群）の登山（第4回）
7月～8月 |
|---|---|

図書受入報告

図書委員会

10 月分受入図書 (つづき)

9. 羽賀正太郎他編「日本の名山 5 ー富士・丹沢と関東の名山ー」ぎょうせい 1983 (版元寄贈)
10. 羽賀正太郎他編「日本の名山 8 ー剣・立山と北部北アルプスー」ぎょうせい 1983 (版元寄贈)

11 月分受入図書

1. 日本ヒンズー・クシュ, カラコルム研究会編「日本ヒンズー・クシュ, カラコルム研究会報告書 第2回」1982 (平岡誠一郎氏寄贈)
2. 亀田山岳会編「風雪 第5号 立川重衛追悼号」1982 (編者寄贈)

12 月分受入図書

1. 環境庁編「上高地地域保全整備計画調査報告書」1982 (佐々保雄氏寄贈)
2. ハンス・シュトルテ著「丹沢夜話」有隣堂 1983 (版元寄贈)
3. 筑木力著「わが出逢いの山々」ほおずき書籍 1983 (著者寄贈)
4. 田中錦彦著「未来への挑戦」汐文社 1983 (版元寄贈)
5. 「日本の名山 7 八ヶ岳・御岳と中央アルプス」ぎょうせい 1983 (版元寄贈)
6. 日本大学理工学部ヒマラヤ委員会編「美しき女神くヒマラヤに魅せられた男たちの記録」日本大学理工学部山稜会編 1983 (編者寄贈)
7. 千葉県立千葉工業高等学校山岳部編「設立 30 周年記念誌」1983 (編者寄贈)
8. 京都大学山岳部編「1980 年 12 月 剣岳遭難報告・追悼」1983 (編者寄贈)
9. 吉住友一著「お山の大将三十年」山と溪谷社 1983 (版元寄贈)
10. 立教大学山岳部編「部報第 10 号」1983 (編者寄贈)
11. 寺林峻著「立山の平蔵三代」東京新聞出版局 1983 (版元寄贈)
12. スビダーニエ同人編「日本語・ウルドゥー語ハ辞典Ⅱ」1983 (編者寄贈)
13. 鳥海山の自然を守る会 白神山地のブナ原生林を守る会編「ブナ林を守る」秋田書房 1983 (版元寄贈) (以下次号)

八十周年記念事業

募金のお願

現在、予想以上の会員の方から申し込みを受けています。未だ応募されていない方は是非ご協力を。(参考) 会長副会長二十口以上、理事六口以上、評議員十口以上の予定)

昭和五十九年六月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイム四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京 (03) 四四三三

振替口座東京三三二九番

印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂